

『在明の別』論：人物造型からみるその志向と構想

小松, 明日佳

<https://hdl.handle.net/2324/4474905>

出版情報：九州大学, 2020, 博士（文学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（3）

氏 名 : 小松明日佳

論 文 名 : 『在明の別』論——人物造型からみるその志向と構想——

学位記番号 : 文博甲第245号

論 文 内 容 の 要 旨

『在明の別』は、平安末期から鎌倉初期に掛けて成立したとされる三巻からなる物語である。巻一では、藤原摂関家の嫡子たるべく、男装して朝廷に仕える右大将が中心人物である。右大将は、妊娠した女性を妻とすることで家の跡継ぎを確保したが、こうして産まれた男子が、巻二、巻三の中心人物となる左大臣である。ただし、彼は出生の秘密を知らない。

平安後期以降の物語においては、先行作品を如何に受容したかが、研究上の重要な論点となっている。『在明の別』においてもそれは同様であるが、従来の研究ではその多くが、個別の人物についてのものであった。そこで、本研究では、こうした先行研究を踏まえつつ、登場人物の相互関係、さらには作品全体の構造へと考察の範囲を広げることで、『在明の別』が描き出そうとしたものとは何か、また、それはどのように形作られているのかを明らかにすることを目指した。各章の概要は、以下の通りである。

〈第一章〉嫡子として活躍した右大将は、女性に戻ったあと、男装時と同じようには社会の中で能力を発揮できないという嘆きを抱える。従来の物語における女性たちは、主に男女関係に起因する苦悩を抱えていたが、右大将はそうした嘆きをも踏まえて、その先にあるものに悩む存在として造型されている。

〈第二章〉女院となったかつての右大将は、左大臣や春宮といった男性に対して、積極的に教育を行う。そこには、女性となったために封印されてしまった男装時代の能力の一端を、改めて発揮する意味合いがある。あくまで女性の領分を逸脱しない程度の描かれ方ではあるが、それでも男性に優る能力をもつ女性が、その力を発揮できる可能性を模索する行為として捉えられる。

〈第三章〉中務宮北の方は、『今とりかへばや』の四の君など、先行作品の女性像を踏まえつつ、性愛に積極的な女性として造型されている。男性との愛欲に溺れ固執する姿は、男性にとって望ましい女性像からは逸脱する一方、既成の枠組みを外れるものではない。また、性愛への特化は、右大将（女院）においては捨象された側面を補完する意味があるとも考えられる。

〈第四章〉三位中将に翻弄された過去を持つ三条の女は、左大臣と結ばれた娘に、男性に愛されるような振る舞いをさせることで、望ましい結果を手に入れる。常識的な規範を逸脱する過

激な女性が目立つ中、本心を隠し、男性の期待に沿う振る舞いをさせることによって、現実的な枠組みの中で安定を得るところに、したたかな女性の知恵と戦略を窺うことができる。

〈第五章〉巻二以降、左大臣が関わる女性たちは、かつて巻一において右大将と関わりのある女性たちである。そして、左大臣との関係によってこれらの女性に訪れる結末は、当事者がそれと意識しないにも関わらず、右大将が抱いた当初の印象と対応するものとなっている。こうした関係性から、左大臣は右大将の「影」のような存在であるとみなすことができる。

〈第六章〉撰関家の跡継ぎである右大将と左大臣の行動は、藤原氏の氏神である春日の神の導きにより、結果的に家にとって好都合となるように仕組まれている。こうした神慮によって家が繁栄する一方、それが優先された陰に、天女である右大将も、不義の子である左大将も、それぞれが自身の本質に無自覚である結果、苦悩を余儀なくされる経緯を明らかにした。

〈第七章〉左大臣の性質を「あやになる御癖」と表現することからは、『源氏物語』の光源氏が想起される。しかし、光源氏に備わる「本性」を持たないため、左大臣はもっぱら「癖」の持ち主として、好色性が強調されていると考えられる。こうした好色性は、従来の物語においては二人づれの片割れの、主人公ではない側に付与される性質であった。左大臣の登場は光源氏を彷彿させる一方、実際には、そうした絶対的存在に相対する人物として造型されている。

〈第八章〉本作品の巻二以降の展開は、『源氏物語』の帚木三帖を変奏したものであると考えられる。ただし、そこでの左大臣と女性たちの関係は、光源氏中心の『源氏物語』とは異なり、女性を主体として描かれている。こうした姿勢は、本作品を通底するものであると認められる。そして、巻二以降で話が決着していく際には、その由来としての巻一を振り返る必要があり、そこに、単線的な展開ではない、本作品の重層的な構造を窺うことができる。

以上を総括すると、『在明の別』では、抑圧された枠組みの中で生きる女性たちが、概ね既存の枠組みに踏み留まりつつも、主体性を持った存在として描かれている。この主体性は、先行作品において繰り返し描かれてきた女性の嘆きを踏まえ、それを如何に克服するかという観点から、現実的にあり得るものとして表現されている。一方で、左大臣の描かれ方からは、男性の存在感は減衰しているというほかない。先行する『源氏物語』や『狭衣物語』にみる、かなわぬ恋を求め続ける男性像を引き継ぐ左大臣ではあるが、実際には、行動力の決定的な欠如から、格の落ちる人物であることが露呈している。

右大将の男装は春日の神の導きによるものであり、家の繁栄にとって都合の良い方向へと、神慮は作用する。作品世界は、こうした超越的な力の偶然性に支配される一方で、巻二以降で決着する事柄については、巻一における出来事と緊密に繋がってくることから、両者を因果関係によって論理的に説明しようとする姿勢も窺える。これはまた、本作品の重層的な構造とも関係し、この重層性は、細かな表現の照応や構成の緻密さによって支えられている。

本作品では、先行作品を受容・変奏しながら、男女の優劣の問題に向き合い、出来事の因果が説明づけられていく。それはあくまで物語という虚構世界における営為ではあるが、そこには、世の中を冷徹にみつめ、それをあり得べき形で表現しようとする意欲が認められよう。